

## 自己フォーカスが携帯電話使用時の 社会的迷惑認知に及ぼす効果

廣岡 秀一<sup>1)</sup>・矢神 祥代<sup>2)</sup>

### The effects of "Self-Focus" on the cognition of social annoying acts in using mobile-phone

Shuichi HIROOKA and Sachiyo YAGAMI

The purpose of this study is to examine the effect of ones "self-focus" those who are observing the other's annoying acts at the time of mobile-phone use on the degree of annoyance cognition of the acts. The existence of "self-focus" was operated by taking a picture of the subjects with a video camera. Annoyance cognition was measured after seeing the video of a annoying act. 91 college students were assigned to three conditions in the experiment. Three conditions are as follows. 1) In a session 1, a subject looks at VTR of annoyance cognition under a non self-focus situation, and a subject looks at VTR under a self-focus situation in a session 2. 2) 2 times of sessions are self-focus conditions. 3) It is only 1 time of a session and they are non self-focus conditions (control conditions). The results obtained are as follows. The "self-focus" do not affect the degree of social annoyance cognition of the other's annoying acts. Moreover, there are no significant differences in the degree of the annoyance cognition by the height of self-consciousness. However, when the session in which subjects observe the annoying acts under a self-focus situation is repeated, there is a tendency for degree of annoyance cognition to become high.

**Key word:** social annoyance, annoying acts, self-focus, self-consciousness

#### 【問題と目的】

携帯電話・PHS（以下総称として「携帯電話」と表記）は、ここ数年で急速に普及し、若者の間では携帯電話を持っていない人を探す方が難しいほど定着している。携帯電話は私たちに様々な影響を与え、日常生活に大きな変化をもたらしてきた。それはただ単に「外出先でも気軽に連絡のとれる便利なモノ」ということだけを意味しない。そこには、新奇なものに対する様々な社会的問題も生じてくる。例えば、授業中に電源を切り忘れて、もしくはマナーモードにし忘れて、着信音が

教室中に響く、電車やバス内で携帯電話を使用し  
て大声で話をしている、携帯電話の画面に夢中  
になりすぎて歩行者とぶつかりそうになるなどの行  
為は、いずれも10数年前までは想像できなかった  
行為であるが、現在に至っては日常的、かつ頻  
繁に経験する出来事である。

この携帯電話の急速な普及、定着に伴って、  
「携帯電話に関する規範」という問題についても  
様々な議論を引き起こしてきたが、いまだ明確な  
コンセンサスが得られるには至っていない。森・  
石田（2000）は「携帯電話の急増期である  
1995～97年に比べ、データ通信サービスの開始・

1) 三重大学教育学部 e-mail:shuhiro@edu.mie-u.ac.jp

2) 三重大学大学院教育学研究科1年 e-mail:yagami@schl.edu.mie-u.ac.jp

着信メロディの普及期の1999年以降は『ケータイ』は通話以外の、着信音は通知以外の意味を持つようになった」としている。つまり、携帯電話の利用形態が多様化したために、公共の場における従来の規準が機能しなくなり、携帯電話使用の規範がより曖昧に、そして問題はより複雑になってしまったとすることができる。

携帯電話が引き起こす諸々の社会的な問題は、社会的迷惑の問題として位置づけることが可能である。社会的迷惑とは、携帯電話だけに限らず、「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として、他者に不快な感情を生起させること、またはその行為である」（吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折，1999）と定義される。これまでの社会的迷惑認知に関する研究では、例えば、吉田ら（1999）が、認知者の個人特性や社会考慮など、認知者側の個人差について検討している。また、迷惑認知は社会意識（和田・久世，1990）や価値観（辻岡・村山，1975）の個人差と関連があることなどが示されている。

ところで、社会的迷惑は、行為者側の要因とその行為者の周囲にいる人間の要因から捉えることが可能である。本研究は後者の要因から前者の要因への影響を考えようとするものである。つまり、迷惑となるような他者の行為を観察する経験が、自己の迷惑行為の抑制へつながる可能性について検討しようとするのである。

迷惑行為に気づくということは迷惑行為を迷惑として認知できることを意味している。しかし、

問題はそう単純ではない。というのも、二者間の認知に大きなズレが生じる場合、すなわち迷惑行為者の行為が被迷惑者にとっては迷惑と認知されるのに、行為者本人にとっては迷惑をかけていると全く感じていない場合が多い。さらに、迷惑行為者と迷惑を被っている人を観察している周囲の認知者がどのように認知しているのかについて考えてみると、その三者間にも大きな認知の差異が生じている可能性がある。つまり、他者の何らかの行為によって直接被害を被り、確実に迷惑であると認知されるような迷惑問題だけでなく、当事者自身が直接被害を被ることがなくても社会的な視点から見れば迷惑となる場合も含めた検討が必要なのである（吉田ら，1999；Fig. 1）。

日常社会では、迷惑だとは思わずに迷惑行為をしている場合もあるし、中には自分がしていることが他者に迷惑をかけていると気づいていながら迷惑行為を行う人もいるだろう。また、人は迷惑を被ったり、迷惑行為を目撃したりもする。つまり、人間は迷惑の行為者にも、認知する人にもなりうるのである。迷惑行為を迷惑と認知できれば、自分自身が他者に迷惑をかけないように配慮することも可能になると考えることもできるが、現実には迷惑を認知したとしてもその迷惑を認知した人自身が他者に迷惑をかけないように動機づけられ、自らの社会的行為に直接反映させるかどうか、つまり行動変容が起こるか否かは難しいところである。

迷惑認知が生じやすい原因の一つとしては、迷

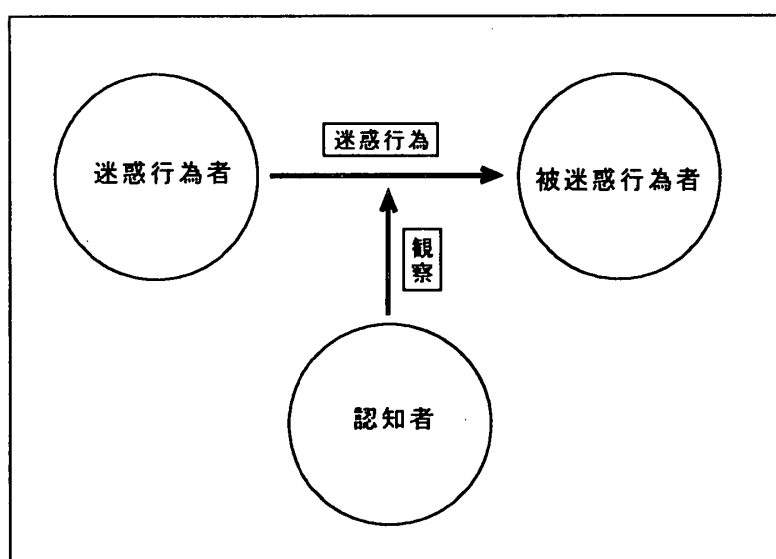


Fig. 1 立場の異なる3者間の認知

惑行為者の側にも認知者の側にも、他者の立場に立って考えるという「他者視点の欠如」をあげることができる。例えば、行為者の側から考えてみると、ある行為が迷惑と感じるかどうかの規準が周りの他者と仮に異なっていれば、まさか自分が他者に迷惑をかけているとは思えず、さらに周囲の人の視点に対して考慮するような動機づけがなければ、その人は自分の行為の迷惑性に気づくことはない。つまり、他者視点を持つことが欠如しているため、自分の行為が周りにどのような影響を及ぼしているかを認知することができず、迷惑行為を迷惑であると気づかないでいる状態が迷惑行為の発生を促しているのである。

ところで、迷惑行為が迷惑だと認知されにくい要因として社会考慮の程度の低さがあげられる。社会考慮とは、他者視点取得の概念を社会的なレベルにまで拡張した考えでもあり、「個人の生活空間を『社会』として意識している程度や複数の個人から成る社会というものを考えようとする態度のこと」である(斎藤 1999, 吉田ら 1999)。社会考慮の高い人は、「ルール・マナー違反」に属する迷惑行為に対して迷惑認知が高いこと(斎藤, 1999)や冠婚葬祭における迷惑行為に対する許容度が低いことが明らかになっている(吉田ら, 1999)ように、身近な他者を含めた社会を考えようとする態度と社会的迷惑認知の間には強い関係が想定される。つまり、他者視点取得や社会考慮などの研究が重視しているのは、自己や他者の行為の観察において、社会的な視点を持つことなのである。

一方、認知者側の自己状態の要因に注目した研究は少ない。対人認知が認知者側の内的状態によって大きく影響を受けていることは、多くの研究が証明してきたことである。また、その場の状況要因によって変化した自己の状態が他者の認知に影響を与えることを示した研究も数多い。つまり、他者の迷惑行為の観察においても、認知者側の内的な状態がその行為の迷惑認知に影響を与える可能性があることは容易に想像できる。こういった考えから、本研究では、自己フォーカス状態、自己意識状態を認知者の要因として取り上げ、他者の行為の迷惑認知に対してどのような影響力を持っているのかについて検討を加える。具体的には、一般的には他者に視点が向いていると考えられる他者の行為の観察時に、自己に注意が向くような実験的操作をすることによって自己フォーカス状態を高め、自分自身に視点がシフトされることの

迷惑認知に対する効果、つまり、迷惑の認知が変化することを確認しようと考えた。

自分自身が自己に注意を向けることを自己フォーカスという(Fig. 2)。人は、自己を強く意識したとき、自分の中で適切だと考えている行動をとろうと動機づけられる。例えば、人前で意見を発表するような時には、そうでないときよりも自分の行動をより適切な方へとコントロールしようするため、自分の中の望ましい姿を他者に見せようとする。

客体的自覚理論(Objective self-awareness)(Duval & Wicklund, 1972)によると、自己フォーカスが高まっている状況では、その場で最も関連性が高く、重要な自己の側面について考えようとするため、その人に内在化された価値観、つまり正しいと思っている規準と現実自己の姿との比較が行われる。その両者の間が正の不一致(現実自己の姿が正しいと思っている規準よりも優れている、あるいはズレがない状態)を起こしていることはほとんどないが、負の不一致(現実自己が正しいと思っている規準より劣っている状態)を起こしていると、人は自分を望ましい姿に近づけようとするため、不一致を低減するように試みる。あるいは、規準と一致するように努力(規準適合)する。すなわち、自己の現実の姿を理想の姿に近づけようとするのである。

これを迷惑行為に当てはめて考えてみよう。人は自分自身を強く意識している(自己フォーカスが高い)状況、例えば、他者に見られているという自覚があるような状況で、自分自身の行為を社会的に見て望ましい行為ではないと感じたとき、自分を望ましい姿に近づけようとして、自分の迷惑行為を正そうとするかもしれない。その結果として、迷惑行為を迷惑であるということが内在化されれば、その人自身が迷惑行為をしてしまうということや、気づかずに迷惑行為をしてしまうことの抑制につながっていくと考えられる。

さらに社会的迷惑認知に影響を及ぼす要因として、認知者の個人差要因をあげることができる。人間の中には迷惑に対して鈍感な人もいれば、敏感な人もいる。つまり、迷惑と感じやすいかどうかの個人差の要因を考える必要がある。

Fenigstein, Scheir, & Buss (1975) は、客体的自覚理論から自己フォーカスの状態における個人差に注目し、自己に意識を向ける傾向である自己意識特性を測定する自己意識尺度(Self-Consciousness Scale)を作成し、3因子から構成

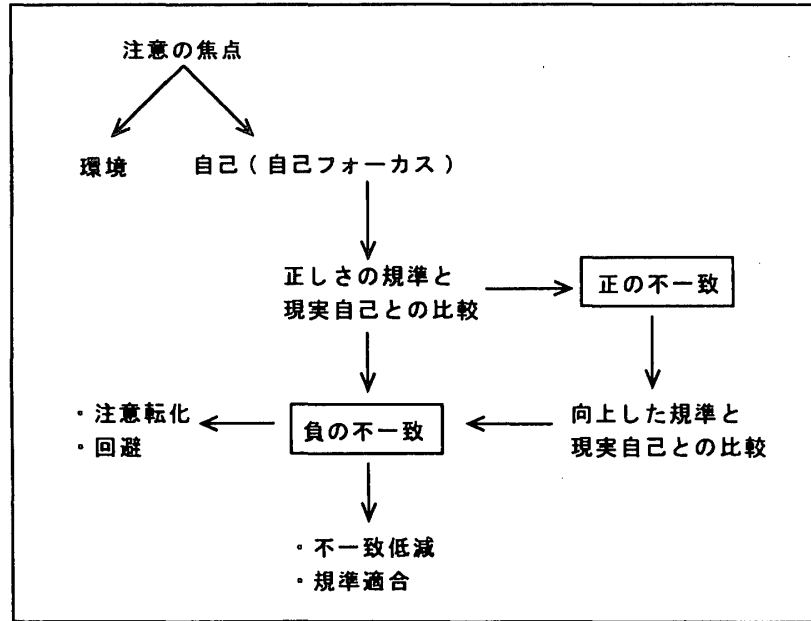


Fig. 2 客体的自覚のプロセス

されることを見いだしている。第1因子は、自己の内面や感情や気分など、他者からは直接観察されない自己の内的な側面に注意を向ける程度を示すもので、私的自己意識 (private self-consciousness) と呼ばれる因子であり、第2因子は、自己の服装や容姿あるいは他者に対する言動など、他者に観察される自己の外的な側面に注意を向ける程度を示すものとして公的自己意識 (public self-consciousness) の因子と呼ばれている。さらに第3因子は、対人状況における不安や羞恥心を示すもので、社会的不安 (social anxiety) の因子と名づけられている。Turne, Scheier, Carver, & Ickes (1978) による自己意識尺度の妥当性に関する研究では、公的自己意識と私的自己意識はほぼ独立する自己意識特性の2つの次元であるといえ、社会的不安は、公的自己意識の1つの帰結であることが見いだされている。

ところで、私的自己意識の高い人は、その時々での自分の意見、態度を自覚しているため、信念・態度と公的行動との一貫性が高いこと (Scheier, 1980) が示されている。すなわち、私的自己意識の高い人は、他者の迷惑行為を迷惑であると認知できていればいるほど、自分の行動に対して迷惑行為の生起頻度が少なくなる可能性が考えられる。一方、公的自己意識が高い人は、他者からの評価に敏感であり (Fenigstein, 1979)、他者の目を意識し得る自己表出の仕方をコントロールする傾向の強いこと

(Scheier, 1980 ; Carver & Humphries, 1981)、規範の影響による同調行動が強いこと (Froming & Carver, 1981 ; 石川・渡辺・押見, 1984) などが示されているように、この自己意識が高い人は、迷惑行為を迷惑であると認知すると、他者の目を意識し、規範に則した行動をするため迷惑に振る舞う可能性が少なくなるのではないかと考えられる。ちなみにBuss (1980) によると、小さい鏡に映った自己像との接触による自己への注意は私的自己意識と対応しており、カメラやテープレコーダー、三面鏡によって外在化された自己との接触や被観察状況による自己への注意は公的自己意識と対応しているということを明らかにしている。

以上より、本研究では、社会的迷惑の問題において、迷惑行為を迷惑であると認知することが重要であると考え、迷惑を認知しやすい状況、つまり、自己フォーカスが高まっている状態で迷惑行為を見たときの認知を個人差要因である自己意識 (Self-consciousness) との関係も考慮しながら検討していくことを目的とする。ところで本研究では、自己フォーカスを実験的に高めるという操作を用いた。これは、被験者が迷惑行為のビデオを見ているときの表情をビデオカメラで録画することを被験者に意識させることで、さらに、被験者自身がビデオカメラで撮られている自分の表情をビデオカメラ付属の液晶画面で見ることで、被験者の自己フォーカスを高めるというものである。

また、自己フォーカスが高まっている状況とそうでない状況との比較を同一被験者内で確認するために、自己フォーカスのない状況で迷惑行為のビデオを見るセッションを1回と自己フォーカスが高まっている状況下でのセッションを1回の計2回のセッションを行う条件を設定した。さらに、自己フォーカスが高まっている状況下で、迷惑認知を観察する経験したときの迷惑認知の変化を確認するため、自己フォーカス状況で迷惑行為のビデオを見るセッションを2回繰り返す条件を設定した。

**仮説1** 自己フォーカスが高まっている状況で迷惑行為を見ると、そうでないときよりも現実の自己と正しさの規準とを比較して、自分を正しい規準に近づけようとするため、迷惑行為を迷惑であると認知しやすい。

**仮説2** 自己フォーカスが高まっている状況で迷惑行為を見ると、自己意識が高い人の方が低い人よりも迷惑行為を迷惑であると認知しやすい。

## 【方法】

### 1. 被験者・迷惑行為ビデオの構成と内容・実験条件

**被験者** M大学学生91名(男性34名、女性57名)。平均年齢は20.1歳であった。

**迷惑行為ビデオの構成および内容** 刺激となる迷惑行為はビデオにて呈示した。その迷惑行為ビデオの構成は、携帯電話における迷惑行為を場面1とし、「記憶の残りやすさの実験」という名目で参加する被験者に迷惑の研究であるということ意識させないため、携帯電話や迷惑行為に関連のない行為(無関連行為)を場面2とした。その場面1と場面2をあわせて呈示することを1つのセッションとした。ビデオに登場する人物Aさんについての回答を求めた。Aさんは、迷惑行為場面では迷惑行為者であり、無関連行為場面では、迷惑とは関係ない行動をとっており、両場面で登場するAさんは、同一人物である。以上のような構成のビデオを2パターン(内容①・内容②)準備した。ビデオの内容は以下の通りである。

**内容① 迷惑行為(場面1)** : 携帯電話の画面に夢中になっているAさんと反対側から歩いてくる2人組が廊下ですれ違いざまに肩がぶつかるが、Aさんは無視をして、歩き続ける。

**無関連行為(場面2)** : Aさんとその友人とが学内にいるとき、Aさんの知り合いが通りかかる。友人は授業があるので、その場を去る。

**内容② 迷惑行為(場面1)** : 図書室で勉強中のAさんの携帯電話の着信音が鳴り、Aさんは携帯電話を持って退室する。退室したところで、電話に出る。

**無関連行為(場面2)** : 友人2人が旅行のパンフレットを見ていると、Aさんが遅れてくる。Aさんが遅れた理由を説明した後、3人で旅行へ行く計画を立て始める。

### 2. 独立変数

独立変数となるのは、自己フォーカス(有・無)である。自己フォーカスを高めるという状況は、ビデオカメラを設置して被験者の表情を録画することで操作した。ビデオカメラにて迷惑行為ビデオを見ているときの表情を録画する自己フォーカスあり(Self-Focus; 以下SF)と表情を録画しない自己フォーカスなし(Non Self-Focus; 以下NSF)である。実験条件は、以下の通りである。

**条件A** : 被験者内要因として自己フォーカスの効果を見るため、NSF状況で迷惑行為ビデオを見るセッションとSF状況で迷惑行為ビデオを見るセッションの計2回のセッションを行う条件であった。

**条件B** : 自己フォーカスが効果を発揮する前提条件として、自己フォーカスが必要かどうかを検討するために設置した。SF状況で迷惑行為ビデオを見るセッションと再びSF状況で迷惑行為ビデオを見るセッションの計2回のセッションを行う条件であった。

**条件C** : 統制群として設置。他の2条件とは違い、セッションは1回のみである(Table1)。

条件Aも条件Bも第1セッションと第2セッションの間に休憩などの時間は置かなかった。

また、ビデオ内容を呈示する順序効果を考慮し、各条件とも呈示順序を入れ替えた2パターン設定し、カウンターバランスをとった。被験者は、各実験条件・各パターンにランダムに割り当てられた。

### 3. 従属変数

従属変数となる迷惑認知の質問項目の内容は、「15. Aさん(迷惑行為者)は、自分の行動が周りの人に影響を及ぼすということを考えていない」、「19. Aさんは、自分とは異なる立場の他者につ

いて考慮していた（逆転項目）」などの迷惑認知を測定する 15 項目であり、これらに対して「1 はい」か「2 いいえ」で回答させた。

被験者は、「記憶の残りやすさの実験」という名目で参加しているため、上記の迷惑認知項目に加えて、「10. Aさんと肩がぶつかったのは、向かって右側の人である（ビデオ内容①）」、「5. Aさんはパソコンを使っていなかった（ビデオ内容②）」などの記憶の残りやすさを測定する 5 項目を入れた。しかし、この 5 項目に関しては、分析対象としなかった。

ビデオは 1 回のセッションに迷惑行為場面と無関連行為場面の 2 場面があるので、無関連行為についても迷惑行為場面と同等の項目を設けて質問紙を回答させた。しかし、無関連行為についても、分析の対象としなかった。

#### 4. 実験手続き

被験者が「迷惑の研究」と意識すると迷惑行為に対する認知に影響が出てしまうことを避けるため「人の記憶の残りやすさに関する研究で、ビデオを見てアンケートに答える実験」という名目で実験に参加してもらった。

##### 1) 被験者入室

実験者が被験者を実験室 1 に案内し、いすに着席させた (Fig. 3)。実験室 1 は、机の上に TV が 1 台とビデオカメラ 1 台を設置していた。ビデオカメラには、液晶画面が付属しており、被験者の表情を録画する際には、被験者の方にその液晶画面を向け、撮られている表情を見せた。なお、NSF 条件でも、ビデオカメラは録画しない状態で設置してあり、液晶画面も閉じ、被験者とは反対に向けて実験を行った。

Table 1 実験条件

	第 1 セッション (ビデオ内容)	第 2 セッション (ビデオ内容)
条件 A	NSF (①)	SF (②)
	NSF (②)	SF (①)
条件 B	SF (①)	SF (②)
	SF (②)	SF (①)
条件 C	NSF (①)	
	NSF (②)	

SF: 自己フォーカス NSF: 自己フォーカスなし

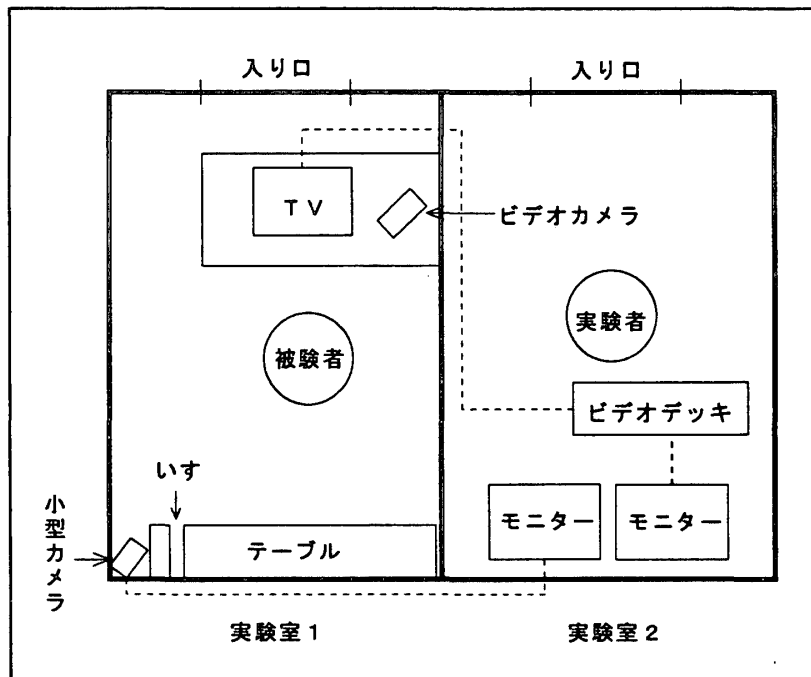


Fig. 3 実験室場面

実験中の被験者の様子および部屋の中の状態を確認するために、被験者の左後方には、小型カメラを設置したが、そのカメラの影響を避けるため、小型カメラの存在は、被験者には知らせていなかった。

実験者は、実験室1にて教示を行い、それ以外は実験室2で待機、およびビデオの操作をした。実験室1と実験室2は壁で仕切られているため、実験者が実験室2にいるときの様子は、被験者にわからないようになっていた。

## 2) 質問紙 (自己意識尺度) 記入

被験者に対して、「研究が2つあるので、まず最初に自己意識に関する調査に回答してください」という説明をし、あらかじめ机に置かれていた自己意識尺度に記入させた。自己意識尺度は、自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人差(自己意識特性)を測定するもので、菅原(1984)が作成したものに新たな1項目を付け加えて用いた。項目内容は、「9. いつも人の目に映る自分の姿について意識してしまう」「19. 常に自分自身を見つめる目を忘れないようにしている」などの22項目である。「1. まったくあてはまらない」から「7. 非常にあてはまる」の7段階で評定させた。

## 3) 「記憶の残りやすさ」の実験説明および第1セッション

### 条件 A (NSF→SF)

記憶の残りやすさに関する研究として実験内容を説明した。その際、被験者が記憶力を測定するものだと構えてしまわないように、「記憶力の程度を測定することや確認する研究ではない」と教示し、迷惑認知尺度を机の上(被験者の目の前)に置いた。さらに、ビデオの構成やAさんについて説明を加えた。実験者が実験室1を退出し、実験室2からビデオの操作をした。

### 条件 B (SF→SF)

条件Aと同様の教示をした後に、「記憶の残りやすさと視線の関係についても調べている」という説明のもと、表情の録画の許可を得た。実験者が実験室1を退出し、実験室2にてビデオの操作をした。

### 条件 C (NSF)

条件Aと同様の教示をした後に、実験者が実験室1を退出し、実験室2にてビデオの操作をした。

## 4) 質問紙 (迷惑認知尺度) 記入

ビデオが終了した後、実験者は実験室1に入室し、被験者に質問紙を記入するように教示した。被験者が記入している最中は、実験者は実験室2にて待機し、モニターにて記入し終えるのを確認をしていた。

## 5) 第2セッション (条件Cはない)

### 条件 A (NSF→SF)

質問紙の記入後、実験者は、再び実験室1に入室し、2回目のビデオを見る教示をした。その際、「記憶の残りやすさと視線の関係についても調べている」という説明のもとで、表情の録画の許可を得た。ビデオの構成と質問紙の構成が1つ目のビデオと同様であることを説明した後、実験者は退出し、実験室2にてビデオの操作をした。

### 条件 B (SF→SF)

質問紙の記入後、実験者は、再び実験室1に入室し、2回目のビデオを見る教示をした。ビデオの構成と質問紙の構成が1つ目のビデオと同様であることを説明し、引き続き表情の録画の許可を得た後、実験者は退出し、実験室2にてビデオの操作をした。

## 6) 質問紙 (迷惑認知尺度) 記入 (条件Cはない)

ビデオが終了した後、実験者は実験室1に入室し、被験者に質問紙を記入するように教示した。被験者が記入している最中は、実験者は実験室2にて待機し、モニターを通して記入し終えるのを確認をしていた。

## 7) デブリーフィング

質問紙の記入後、実験者は実験室1に入室し、実験の本当の目的と小型カメラで実験中の様子を確認していたことを被験者に伝え、その後の分析の了承を得て、実験を終了した。

## 【結果と考察】

### 1. 分析対象について

質問紙に記入漏れがあったものを分析データから除外した。結果、分析対象となった被験者数は、条件A28名(男性13名、女性15名)、条件B28名(男性10名、女性18名)、条件C31名(男性8名、女性23名)であった。

### 2. 自己フォーカスが迷惑認知に及ぼす効果について

記憶の残りやすさ項目を除外した迷惑行為場面

のみの迷惑認知尺度の15項目について「はい」を2点、「いいえ」を1点として合計し、項目数で割ったものを迷惑認知得点として、以下の分析を行った。

1) ビデオ内容のカウンターバランスについて

被験者に見せる迷惑行為ビデオを2種類(内容①・内容②)用意した。条件Aと条件Bについては、2セッション設けたためその順序効果を相殺するため、カウンターバランスをとった。

ビデオ内容(内容①と内容②)の均質性を確認するため、各条件の各セッションに対応するビデオ内容①と内容②の迷惑認知得点についてt検定を行ったところ、ビデオ内容①と内容②の間に有意な差、および有意傾向がみられた(条件A第1セッション,  $t(26) = 2.87, p < .01$ 、条件A第2セッション,  $t(26) = -1.73, p < .10$ 、条件B第1セッション,  $t(26) = 3.97, p < .01$ 、条件B第2セッション,  $t(26) = -2.17, p < .05$ 、条件C第1セッション,  $t(29) = 3.30, p < .01$ )。この結果より、総じて、ビデオ内容①の方が内容②よりも迷惑認知度が高いことがわかる。これは、ビデオ内容の迷惑のレベルが異なるということを表している。

ビデオ内容①は、自己フォーカス状況であるかにかかわらず、迷惑認知度が極めて高い得点を示していた。本研究は、迷惑の認知者の個人内要因に焦点があり、ビデオを見る人の状態によって迷惑認知が変化する刺激が必要である。つまり、ビデオ内容①は本研究の目的に照らし合わせた場合、実験刺激として適していないと判断してもよいであろう。このような観点から、以後の分析では、ビデオ内容②に対する反応だけをその対象とした。

2) 自己フォーカスの効果について

自己フォーカスが迷惑認知に及ぼす効果を見るために、条件間および各セッション間の迷惑認知の差について検討した。各条件・各セッションにおける迷惑認知の平均値はTable2の通りである。

ビデオで表情を録画しないNSF状況(条件A

の第1セッションと条件C)での迷惑認知に差があるかどうかをみるために、迷惑認知得点についてt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった( $t(28) = .676, n.s.$ )。これは、条件AのNSF状況におかれた被験者の認知が偏っているかどうかを確認するため、同状況である条件Cと比較したものである。このことから、自己に対して意識的にならないNSF条件では、迷惑認知に偏りがなかったといつてよいだろう。

SF状況とNSF状況における迷惑認知を比較するため、条件Bの第1セッションと条件Cにおける迷惑認知得点についてt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった( $t(28) = -1.78, n.s.$ )。同様に、条件Aの第1セッションと条件Bの第1セッションにおける迷惑認知についてもt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった( $t(26) = 1.16, n.s.$ )。これは、SF状況とそうでない状況では、迷惑の感じる度合に差がないということを表している。このことから、状況において自己を意識しているかどうかは、迷惑の認知に影響を及ぼしてはいないことが示されたと言えよう。

NSF状況で迷惑行為を見てからSF状況下での迷惑行為を見る、という一連の経験における自己フォーカスの効果を見るために、条件Aの第1セッションと第2セッションにおける迷惑認知得点についてt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった( $t(26) = 1.42, n.s.$ )。これは、NSF状況での迷惑行為の認知とSF状況での迷惑認知に差がないということであり、そのような一連の流れにおいて自己に対して意識的になる自己フォーカスの効果はなかったということになる。

自己フォーカス状況下の経験数が迷惑認知に及ぼす効果についてみるために、条件Bの第1セッションと第2セッションにおける迷惑認知得点についてt検定を行ったところ、有意な差がみられた( $t(26) = 3.32, p < .01$ )。これは、一概には

Table 2 各条件・各セッション間における迷惑認知の平均値

	第1セッション(ビデオ内容)	第2セッション(ビデオ内容)
条件A	1.83 (①)	1.74 (②)
	1.61 (②)	1.96 (①)
条件B	1.79 (①)	1.76 (②)
	1.51 (②)	1.89 (①)
条件C	1.84 (①)	
	1.65 (②)	



言えないが、第1セッションにてビデオを見た後の質問紙を経験することによる学習効果や自己フォーカス状況に慣れが生じた可能性があるとも考えられる。

以上のような結果から、全体を通して、ビデオカメラによって状況的に自己に対して意識的になる自己フォーカスが迷惑認知に及ぼす効果は確認できず、仮説1を支持するものではなかった。ただし、実験室に被験者として入ることがすでに緊張感やある種の構えが生じさせており、その効果に比べると、ビデオカメラで撮られることによって自己に意識的にさせる効果は、さほど大きくなかった可能性も残されている。

### 3. 自己意識について

#### 1) 因子分析

自己意識尺度に関する22項目について主因子法、バリマックス回転による因子分析を行い、菅原(1984)と同様の2因子を抽出した(Table 3)。因子負荷量がどの因子にも.40に満たなかった3項目を除外し、再度因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行い、再度、2因子を抽出した。

さらに、第I因子に高い負荷量を示していた10項目を菅原(1984)に従い、「公的自己意識」因子( $\alpha = .89$ )、第II因子について高い負荷量を示していた10項目を「私的自己意識」因子( $\alpha = .80$ )と解釈し、これらの項目得点を因子ごとに合計したものを公的自己意識得点、私的自己意識得点とし、その後の分析を行った。

#### 4. 自己意識が迷惑認知に及ぼす効果について

公的自己意識得点と私的自己意識得点のそれぞれについて、平均より高いものをH群、平均よりも低いものをL群の2群に分けた。

##### 1) 自己フォーカスの効果について

NSF→SFという一連の経験が迷惑認知に及ぼす効果をみるために、条件Aの第1セッションでNSF状況から第2セッションにおいてSF状況を経験する条件Aについて自己フォーカス(SF・NSF)と公的自己意識(H・L)、私的自己意識(H・L)における迷惑認知得点について2要因の分散分析を行った。

##### 条件Aの第1セッションと第2セッション

自己フォーカス(2)×公的自己意識(2)につ

Table 3 因子分析(主因子法、バリマックス回転)自己意識尺度

項 目	因子 I	因子 II	共通性
1 世間体など気にならない	.49	.11	.249
2 いつも自分がどんな人間であるかを理解しようとしている	.02	.52	.274
4 離れたところから自分を見ている自分を感じることもある	.00	.49	.242
5 しばしば自分の心を理解しようとする	.03	.62	.468
6 他人からの評価を考えながら行動する	.72	.11	.529
8 何か問題を解くときの自分の心の動きをそのままに感じる	-.01	.40	.164
9 いつも人の目に映る自分の姿について意識してしまう	.76	.05	.584
10 その時々のおもてなしの動きを自分自身でつかんでいたい	.23	.62	.434
11 自分についてのうわさに関心がある	.79	.02	.628
12 人前で何かするとき自分のしぐさや姿が気になる	.76	.00	.580
13 自分が本当は何をしたいのか考えながら行動する	.06	.49	.240
14 自分を反省してみるが多い	.25	.45	.265
15 自分の発言を他人がどう受け取ったか気になる	.60	.40	.520
16 人に見られているとつい格好つけてしまう	.50	.14	.268
17 他人を見るように自分を眺めてみることもある	.04	.58	.333
18 人に良い印象を与えているかどうかよく心配する方だ	.65	.19	.465
19 常に自分自身を見つめる目を忘れないようにしている	-.01	.69	.481
20 人と会うときどんなふうにも振る舞えばよいのか気になる	.57	.04	.328
21 自分自身の内面のことにはあまり関心がない	.23	.52	.320
22 自分が他人にどう思われているのか気になる	.92	.05	.849
因子寄与	5.01	3.20	
寄与率(%)	25.08	16.01	

いては、主効果、交互作用ともみられなかった (Fig. 4)。しかし、自己フォーカス (2) ×私的自己意識 (2) においては、その交互作用が有意であった ( $F(1, 24) = 8.33, p < .01$ ; Fig. 5)。

Fig. 4 および Fig. 5 を見ると、2つの自己意識 (公的自己意識・私的自己意識) に関しては類似したグラフになっていることがわかる。自己意識 H 群に関して言えば、自己フォーカスなしよりも自己フォーカスありの方が迷惑認知が下がっているが、L 群では、自己フォーカスありの方が自己フォーカスなしよりも迷惑認知が上がっており、自己フォーカスの効果がある可能性が考えられる。

つまり、自己意識が高い人に関しては、自己に意識的になるという状況において迷惑行為を観察すると、意識的ではない状況よりも、それを迷惑と感じにくい傾向にある。一方、自己意識が低い人に関しては、自己を強く意識するという状況はそうでないときよりも迷惑行為を迷惑であると感じやすくさせるということを示している。自己を意識させる状況での迷惑行為を迷惑であると認知

するには、自己意識が高い人よりも低い人の方が有効であることが示されたわけで、これは、仮説 2 を支持する結果である。

条件 A の第 1 セッションと条件 B の第 1 セッション

自己フォーカスが迷惑行為を観察することに対してどのように影響しているかを明らかにするために、条件 A の第 1 セッションにおける NSF と条件 B の第 1 セッションにおける SF について、自己フォーカス (SF・NSF) と公的自己意識 (H・L)、私的自己意識 (H・L) における迷惑認知得点について 2 要因の分散分析を行った。

自己フォーカス (2) ×公的自己意識 (2) について、公的自己意識の主効果に有意な傾向がみられた ( $F(1, 24) = 3.00, p < .10$ ; Fig. 6)。自己フォーカス (2) ×私的自己意識 (2) について、自己フォーカスの主効果に有意な傾向がみられた ( $F(1, 24) = 3.34, p < .10$ )。また、交互作用がみられた ( $F(1, 24) = 5.30, p < .05$ ; Fig. 7)。

つまり、2つの自己意識ともに、予想していた方向とは逆に、自己フォーカス状況の方が自己フォー

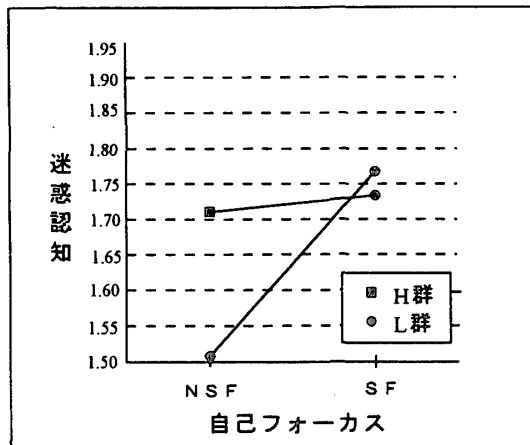


Fig. 4 公的自己意識 × 自己フォーカス

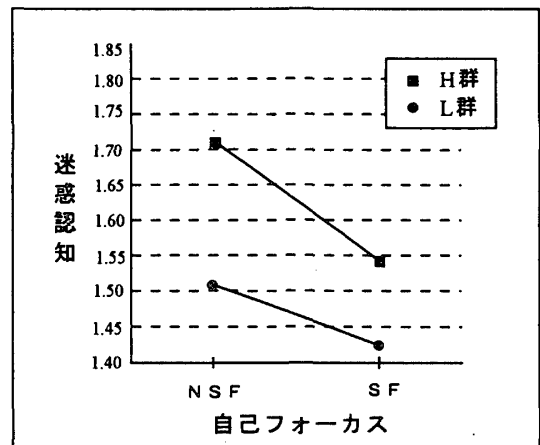


Fig. 6 公的自己意識 × 自己フォーカス

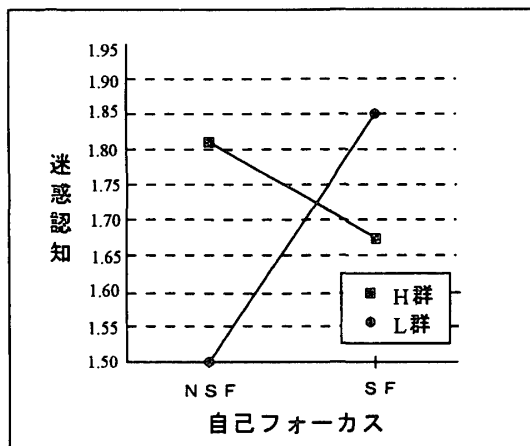


Fig. 5 私的自己意識 × 自己フォーカス

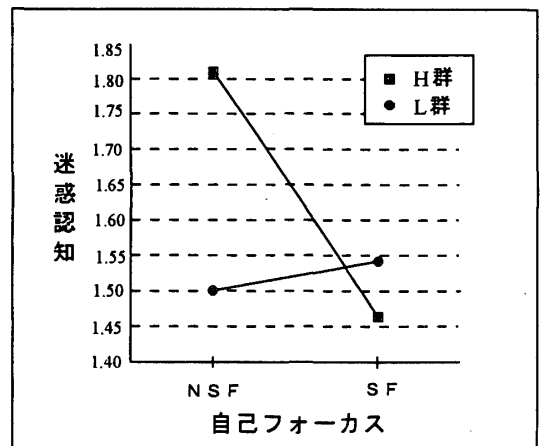


Fig. 7 私的自己意識 × 自己フォーカス

カスなし状況よりも迷惑認知得点が低く、特に自己意識H群だけで見ると、自己フォーカス条件の方が極端に迷惑認知が下がっているという傾向を示している。これは、仮説2を支持するものではない。菅原(1984)によると、公的自己意識に関しては、不安傾向と正の相関があるとしていることから、自己意識の高い人の中には不安傾向も高く、新規な実験場面での不安の高まりが逃避のプロセスをとらせてしまい、迷惑行為を迷惑と認知できなかつたという可能性を指摘しておきたい。

ここで、2つの自己意識(公的自己意識・私的自己意識)の高い人について言えることは、条件Bの第1セッションと第2セッションの間に有意な差があることである。つまり、自己意識が高い人は、自己フォーカス状況における迷惑行為を見る経験をしておくと、次回の迷惑行為の認知に影響し、迷惑を迷惑と感じやすくなっているということがわかる。

また、どの得点についても条件Aの第1セッションと条件Bの第1セッションの間に有意な差がみられた。しかし、SF状況の方がそうでないときよりも迷惑を迷惑と感じやすいという仮説に反して、どの自己意識得点においても条件Aの第1セッション(NSF)よりも条件Bの第1セッション(SF)の方が迷惑認知得点が低くなっている。これは、自己意識が高い人は、自己に注意が向く状況におかれると、逆に迷惑認知を抑制してしまう可能性を示している。

一方、自己意識のL群について、私的自己意識に関して言えることは、条件Aの第1セッションと第2セッションの間に有意な差がみられたということである。つまり、私的自己意識の低い人に関して言えば、自己に注意が向いていない状況から自己に注意が向く状況に移ると、今まで迷惑と思っていなかった行為を迷惑行為であると思うようになる可能性があることを示している。これは、仮説2を支持するものである。

## 2) セッション回数の効果について

条件Bは、自己フォーカス状況において迷惑行為のビデオを見るというセッションの経験数が迷惑認知に及ぼす効果を確認するために設定したものである。そこで、第1セッションが自己を意識的にさせるSF状況で、第2セッションにおいても同様のSF状況を設定した条件Bにおける迷惑認知について、セッション(1回目・2回目)と自己意識(H・L)における迷惑認知得点につ

いて2要因の分散分析を、自己意識ごとに行った。

セッション(2)×公的自己意識(2)についてセッション回数と公的自己意識に主効果がみられた(セッション、 $F(1, 24) = 17.22, p < .01$ 、公的自己意識、 $F(1, 24) = 17.22, p < .05$ ; Fig. 8)。セッション(2)×私的自己意識(2)については、セッションに主効果がみられた( $F(1, 24) = 9.32, p < .01$ ; Fig. 9)。

セッションの主効果がみられたのは、第1セッションよりも第2セッションの方が迷惑認知が高いということであり、SF状況下では、セッションを重ねるほど、迷惑認知が上がっていくという可能性があると考えられる。しかし、本実験では、セッション数が2回しかないため推測の域を出ない。この可能性を確認するためには、SF状況で、セッションを数回繰り返す行方実験を実施する必要があるが、検討してみる価値のある課題だと思われる。

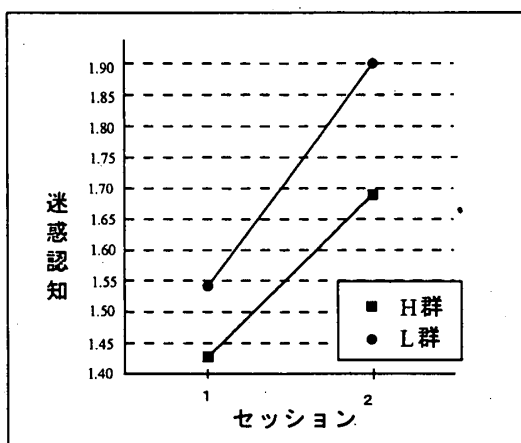


Fig. 8 公的自己意識×セッション

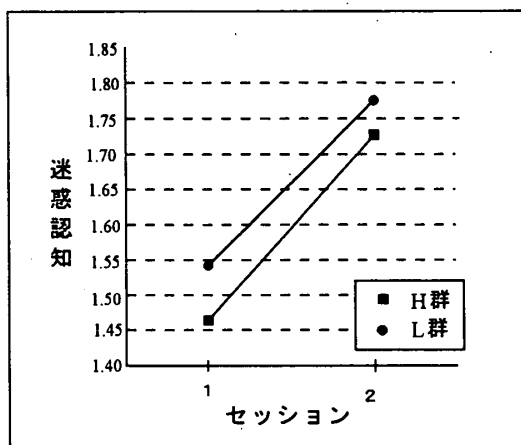


Fig. 9 私的自己意識×セッション

5. 公的自己意識と私的自己意識による自己フォーカスの効果

公的自己意識が高い人は、他者からの評価に敏感であり (Fenigstein, 1979)、他者の目を意識し得る自己表出の仕方をコントロールする傾向の強いこと (Scheir, 1980; Carver & Humphries, 1981)、規範的影響による同調行動が強いこと (Froming & Carver, 1981; 石川・渡辺・押見, 1984) などが示されていることから、公的自己意識が高い人は、社会的迷惑を迷惑であると認知しやすいと考えられる。しかし、結果は概して、自己意識の高い人が自己を意識する自己フォーカス状態にあると、迷惑を認知しにくいというものであり、自己意識の違いによってその結果も若干異なるものであった。

そこで、公的自己意識と私的自己意識の高低の組み合わせによって迷惑認知に違いが見られるかどうかを検討しようと試みた。この目的に対しては、本来迷惑認知について公的自己意識 (H・L) × 私的自己意識 (H・L) × 自己フォーカス (NSF・SF) の3要因分散分析を行うべきであるが、被験者数の制限があり、条件の組み合わせによるセルの中には極端に被験者数が少ないセルがあったことから、分散分析は妥当でないと考えた。そこで、それぞれのセルごとに平均値を算出し、それをグラフ化したもの (Fig. 10) からその傾向を読み取ることとした。Fig. 10 から推測できることは、公的・私的自己意識 HL 群において、NSF 状況と SF 状況で迷惑認知に大きな差がある

ことである。つまり、HL 群において自己フォーカスの効果が大きくなる可能性が考えられる。これに対して、他の3群 (HH, LH, LL) においては、自己フォーカスの違いによって迷惑認知に大きな差を読み取ることはできない。

この結果から、公的自己意識が高く、私的自己意識が低い人は、自己フォーカスでない状況よりも自己フォーカスの状況の方が迷惑を迷惑であると認知する可能性が示された。被験者数が少ないことからこの解釈の正当性については慎重になるべきであるが、この可能性についても今後さらに検討してみる必要があるだろう。

6. 全体考察

結果をまとめると、以下のようなことが言える。本研究では、まず第一に自己フォーカスが迷惑認知に及ぼす効果について、全体的に自己フォーカスの効果がないということが示された。これは、実験室場面という特殊な状況であるため、実験が始まる前にすでに被験者は自己に対して意識的になっているという可能性が考えられる。そのため、ビデオカメラで表情を録画するということと録画しないということに明確な差がなかったのではないかと考えられる。このことから自己フォーカスの効果を引き出すためには、被験者が、実験の対象となっていないと認識できるような実験場面を設定し、同様の検討をしてみる必要があるだろう。

自己フォーカスと自己意識に関する迷惑認知の違いは、部分的に仮説2を支持するものであった。

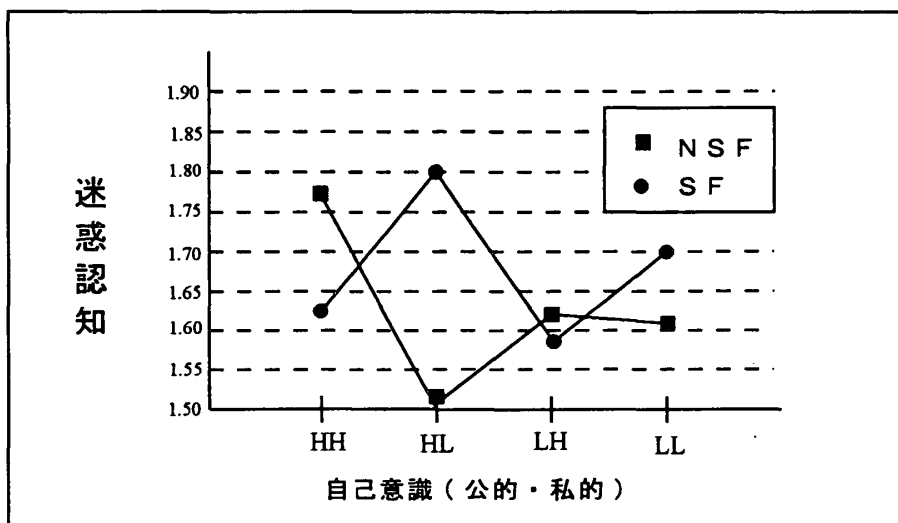


Fig. 10 自己意識 (公的・私的) × 自己フォーカス

自己意識L群については、自己フォーカスなし条件よりも自己フォーカス条件の方が迷惑認知得点が高くなるという傾向にあった。これは、自己意識が低い人が自己を意識するような状況におかれれば、迷惑行為を迷惑と感じやすくなるということである。一方、自己意識が高い人に関しては、自己フォーカスが高まっていない状況よりも、自己フォーカスが高まっている状況の方が、迷惑認知得点が高いという傾向が部分的にみられた。特に、条件Aに関して言えば、第1セッションとは違って第2セッションはビデオカメラで表情を撮るという条件がつけ加わることで迷惑認知度が低下しており、予測していた自己フォーカスの効果とは逆の効果が現れていた。これは、客体的自覚状態理論のプロセス (Fig. 2) における注意転化、もしくは回避がなされ、注意を自己からそらして自覚状態を回避しようとする過程を経ることによって迷惑認知が低くなったということも考えられる。

また、公的自己意識特性は、概念上相反する不安意識と自己顕示性がともに公的自己意識と正の相関を持ち、他者の目に映る自己を強く意識しやすい人は、積極的な自己呈示行動か、逆に逃避的行動をとりやすいということを示唆している (菅原, 1984)。本実験では、日常的な迷惑行為の観察場面と異なり、実験室に入って被験者となる緊張感の高まりの中での観察である。公的自己意識が高い人の中には、より緊張感や不安感を感じてしまい、VTRに集中できなかったなどの要因が考えられることから、より日常的な場面に近い実験場面を設定した上で検討してみる必要がある。

## 【要 約】

本研究の目的は、迷惑の観察者に自己フォーカス、つまり自己を意識させることによって、携帯電話使用時における社会的迷惑認知に与える効果を検討するものである。実験では、大学生91名が3条件に割り当てられた。3条件は、以下の通りである。1) 第1セッションにおいて被験者は自己フォーカスなし状況下で、迷惑認知のVTRを見て、第2セッションにおいて被験者は自己フォーカス状況下でVTRを見る。2) 2回のセッションとも自己フォーカス条件である。3) 1回のセッションのみで、自己フォーカスなし条件 (統制条件) である。自己フォーカスの有無は、被験者が

ビデオカメラで撮影されることによって操作された。迷惑行為のビデオを見た後、迷惑認知を測定した。その結果、自己フォーカスの有無は社会的迷惑認知の程度に影響を与えなかった。また、自己意識の高低についても、迷惑認知に有意な差はみられなかった。しかし、自己フォーカス状況下で迷惑行為を観察するセッションを繰り返すと迷惑認知が高くなる傾向があった。

## 【引用文献】

- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco, Calif.: Freeman
- Carver, C. S., & Humphries, C. 1981 Havana daydreaming: A study of self-consciousness and the negative reference group among Cuban-Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 545-552
- Duval, S. & Wicklund, R. A 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press
- Fenigstein, A. 1979 Self-consciousness, self-attention, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75-86
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 2000 社会的迷惑に関する研究 (2) - 迷惑認知の根拠に関する分析 - 名古屋大学教育学部紀要 (心理人間発達科学科), 47, 25-33
- 森久美子・石田靖彦 2000 迷惑の生成と受容に関する研究 (3) - 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 102-103
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1986 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, 28, 1-15
- 斎藤和志 1999 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集 (文学部篇), 24, 67-77
- Scheier, M. F. 1980 Effect of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness

- scale) 日本語版作成の試み心理学研究, 55,  
184-188
- Turner, R. G., Scheier, M. F., Carver, C. S., &  
Ickes, W. 1978 Correlates of self-consciousness.  
*Journal of Personality Assessment*, 42, 285-289
- 辻岡美延・村山 繁 1975 価値観の六次元 関  
西大学社会学部紀要, 7, 161-174
- 和田実・久世敏雄 1990 現代青年の規範意識と  
私生活主義-パーソナリティ特性との関連につ  
いて-名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科),  
37, 23-30
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡  
秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充  
隆 1999 社会的迷惑に関する研究(1) 名  
古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 53-73